

2016 年度米国細胞生物学会報告

澤 口 朗

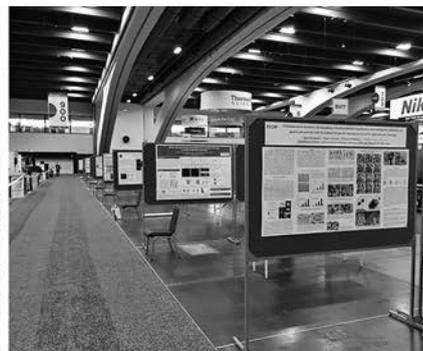
次世代顕微サイエンス若手研究部会責任者
宮崎大学医学部解剖学講座超微形態科学分野

2016年12月3日から7日までの5日間、2016年度米国細胞生物学会（ASCB2016: The American Society for Cell Biology）がカリフォルニア州サンフランシスコ中心に位置するモスコーンセンターにて開催されました。ユニオンスクエアには巨大なツリーが飾られ、街中にクリスマスソングが流れる中、世界各国から6,000名以上の研究者が集いました。2,482題を数えるポスター発表は3日間、約800題ずつ貼り替えられ、企業展示は250以上を数えるなど、最大級の学術集会となりました。さらに今年度は、同学会員の大隅良典博士にノーベル生理学・医学賞を受賞されたことへの祝福ムードも加わり、一層の盛り上がりを見せておりました。

学会場に到着後、アメリカンスタイルでコーヒーを片手にポスター会場を廻ってみたところ、真っ先に「電子顕微鏡が戻ってきた」ことを実感しました。2002年に初参加した当時は、分子生物学的手法と蛍光免疫標識による局在解析が主流で、モノクロの電顕写真は影を潜めていましたが、今回は約3割のポスターに電顕写真が掲載されておりました。蛍光免疫標識の華やかさには劣るものの、細胞内で展開される微細な構造変化をモノクロながらも高い解像度で明瞭に解き明かす威力が見直され、3次元立体再構築をはじめとする多角的な電顕解析が随所に見られました。

今回は次世代顕微サイエンス若手研究部会の取り組みも含めての参加でしたが、シンポジウム・口演会場とポスター会場を早足で往来する参加者に学部学生・大学院生をはじめとする若手研究者の姿が多く見受けられたことが印象的でした。その背景には幾つかの要因が考えられますが、若手研究者に「チャンス」が与えられていることが大きく作用しているようでした。その一例として、口演の多くはポスター発表の中から選抜されますが、「ミニ」シンポジウムのカテゴリで270題に15分間の口演機会が与えられたことに加え、発表5分+質疑応答2分=7分間と短い時間ながら若手研究者を中心に「マイクロ」シンポジウム162題の口演機会が用意されておりました。またポスター会場の一角には「Carrier Center」が設けられ、主に学部学生・大学院生を対象に「研究ポスト獲得」や「論文作成」「研究費申請」などのセッションが生まれ、50席では足りず立ち見の参加者がポスター会場にはみ出すほどの盛況ぶりでした。研究成果の発表や最新情報の入手・交換のみならず「この学会に所属すれば将来が拓ける」思いを若手研究者に抱かせる米国細胞生物学会の姿勢が伝わってきて、まさしく“SOCIETY” for Cell Biologyであることを肌で感じた次第です。

ノーベル生理学・医学賞が授与されたiPS細胞の開発やオートファジーの発見をはじめ、日本人研究者によって切り拓かれた細胞生物学の新たな研究領域が海外の若手研究者に夢と希望を与え、次世代を担う貴重な人材が育成されている様子を見て、日本顕微鏡学会をはじめとする国内の学会でも同様の動きが一層加速することを期待して止みません。その一方で近年、日本からの演題や参加者が減少していることが気がかりですが、次回の2017年度開催地であるフィラデルフィアでは日本からも多くの若手研究者が参加し、研究成果を世界に向けて発信する光景が繰り広げられることを楽しみにしております。



Akira Sawaguchi: Annual Meeting of the American Society for Cell Biology 2016
〒889-1692 宮崎県宮崎市清武町木原 5200
TEL: 0985-85-1784; FAX: 0985-85-8406
E-mail: akira_sawaguchi@med.miyazaki-u.ac.jp
2017年1月29日受付